

現代農村における「いえ」と「むら」に関する一考察

島根県立江津高等学校 狩野寿夫

1. はじめに

現代農村の危機が叫ばれて久しい。農業の危機、共同体の衰退など、農村社会は崩壊下も同然という論調である。

しかし、筆者が農村と呼ばれる地域に居住してみて、必ずしもそうとはいえないことを実感する。生活・農業に関する共同場面もあり、住民の村落に対する帰属意識も強い。そこで現代農村の実情を探求する出発点として、「現代農村における「いえ」と「むら」」（塚本哲人編著、未来社、1992）を題材として、その実証方法について検討する。

2. 地域社会と教育をめぐる視点

1970年に入り、高度経済成長の歪みが表面化し、農村・都市とも大きな変貌を遂げた。これに対応して社会学でも、農村・都市を包摂した「地域社会学」が登場し、中でも「コミュニティ論」が注目された。一方、この時期より学校教育の荒廃が指摘されるようになり、児童・生徒の教育に学校、家庭、そして地域社会はどのように関与すべきかが問われた。教育社会学においても、地域社会と教育をめぐる追求が中心的な主題となった時期もあった。例えば、松原治郎らは長野県上田市でのフィールド・ワークに基づいて、「地域学習社会」の現状と課題をとらえ、矢野峻らは九州の都市・近郊・農村の比較調査によって、学校教育を中心とした家庭と地域社会の現状と課題を考えるものであった。確かにこれらは現状に対する分析については学ぶべき点は多かったが、現状に至る歴史的背景に対する説明は十分とは言えない面があった。各地域の人間は、当該地域の様々な諸要因に規定されつつ、日常の生活を蓄積させた空間の中で、成長という時間を経験していく。学校はその地域の社会のもつ特性、いうなれば「地域性」に規定されていると考えられるが、同時に学校という存在は人間の生涯の一部のみに関与するのであることも考慮しなくてはならない。また、「地域性」を醸し出した歴史的背景も探求されなければならない。ならば、学校から家庭・地域社会をとらえるのではなく、逆に家庭・地域社会から学校を含めた教育を照射する視点が必要ではないか、と考える。その意味では、農村における「いえ」と「むら」の現状を探ることに原点を求めることができるのではないか、と考える。

3. 本書の内容と今後の課題

塚本哲人の姿勢は、「農村地域に生活する住民の側に厳然と存在する、農村生活を維持し、防衛する住民の取り組み」(1)を「生活者の営みそのものを内面から理解」(2)することにある。それは農村研究の歴史に対する彼自身の総括、さらには彼の教え子たちによるモノグラフにも一貫している。筆者も本書を通して彼らから多くを学んだ。これに加えて筆者としては、旧家や寺社など、いわば以前より農村内で権威を付与された家族と村落社会との関係と現状についての解明を当面の課題として行きたい。

(1)(2) 塚本哲人編著、『現代農村における「いえ」と「むら」』、未来社、1992、37頁